天文同好會々報

○藤村天文臺 去る四月二十五日、大阪放送局の樓上で、藤村天文臺の建築委員會の第一回が開かれ、山本、藤村、吉岡、百濟、宮森の五氏が皆顔を揃へた。相談は順調に進みつゝある。

○倉敷天文臺 去る四月中旬、英國ベーカー社へ注文狀と共に送金した。器械は三ヶ月乃至四ヶ月後には神戸へ着くだらう。尙、建築委員の原、水野兩氏は目下建築敷地の撰定について奔走中。近く、具體案を持つて上洛せられる筈。

○山本幹事 既報の如く、來る七月一日より約三週間、滿洲支部の幹旋と南滿鐵道の招待により渡滿、「天體宇宙と其の構造」の題で、大連、奉天、撫順、長春、安東の各地に出張講演せられる筈。尙其の以前、山口縣で天文講習會に臨まれる豫定である。又、八月上旬には、昨年と同じく、京都帝國大學の夏期講演會に、「恒星界の天文學」と題して一週間連續の講演をせられる豫定である。

○上田理學士 本會上田幹事は今夏八月上旬、京都帝國大學夏期講演會の臨時講演として「時計の話」を講ぜられる筈。

○年鑑發刊の計畫 來年1927年度からは本會の新事業として「天文年鑑」なるものが毎年發刊されることに略々議がまとまつた。事業は主として本會觀測部豫報課に於いて行ふ筈で、主任は上田幹事が當られる。第一卷は多分本年十一月に發行されることゝなるだらう。詳細は追報する。

○會費割引の件 去る四月十一日、岡山に於ける本會總會に於いて協議の結果、會員が若し一年分の會費を前納される時は年額金6圓を特に金5圓に割引することゝなつた。(本誌前號第270頁の改正規則參照) 會員諸氏は之れを御含みの上、成るべく此の特典を利用して、一年分前納して下さい。

○太陽觀測の盛況 本會員たちの太陽黑點觀測の今までの狀況は本誌第53號所載の通りであるが、あの號の記事に刺戟されて、全國各地に新しい觀測者が續々と現はれて來た。これは學界のため、又、本會のため益々喜こぶべきことである。何れ近い內に此等の人々の努力を誌上に公表する。——之れに習つて、本會觀測部の他の諸課も奮發が望ましい。現今、不斷の努力を續けてゐるのは每月の豫報課と太陽課とである。流星課も、黃道光課も、多少活動してゐるが、彗星課と變光星課とは比較的には盛んでない。

○東京支部第二回報告

會員　淺野　俊雄

我が東京支部は三月下旬、本部の山本敎授上田助敎授中村要三氏の御上京を機とし五藤支部幹事の熱心なる奔走により、次の通り種々有益なる催をなせり。

山本敎授のラヂオ放送

下記支部の諸催の外山本敎授は東京放送局より、三月二十三日夜は「太陽の近狀」二十四日夜は「春の星座」なる科學講話を放送せられ、天文知識の普及と同好會の宣傳を計らる、第一日は平易明解に太陽の近狀を說かれ、第二日は地上と等しく青春の歡喜に潤へるが如き春の夜の星座の詩情を傳へられ一般聽取者に多大の感銘を與へられた。

1、通俗講演會

三月二十七日午後六時より丸ノ內商工奬勵館大ホールに於て開催す。

山本博士の「藝術としての天文學」なる講演あり、講演中山本博士撮影の及びヤーキス、ウイルソン山兩天文臺撮影の、珍奇なる天文寫眞幻燈數十枚を映寫して興を添へ、先生の魅惑的な說明と相俟つて、聽衆に大なるセンセイシヨンを與へた、九時半終了聽衆約三百名講演實に三時間半の長きに亘りしも、途中の退席者極めて少數にて皆最後まで靜肅熱心に聽取したのは、一般聽衆を收容したる此種講演會としては稀なる成功であつた。

それより會館屋上に80粍天體望遠鏡二臺を設へ月土星其他を觀望に供す、觀覽者約百五十名何れも興の盡くるを知らず、十二時に及んで漸く散會した。

2、第一回講習會

本會員の天文學基礎知識涵養の爲下記の科目に就いて第一回講習會を開く、參集者每日約二十名會場は日本光學工業會社、每夜七時より十時過まで。

A、基礎天文學　　山本理學博士

三月二十二日、二十三日、二十五日、二十六日の(四日間)

講習科目

イ、天　球——星座、經緯度、諸運行、曆。
ロ、太陽系——軌道、太陽、遊星、彗星流星、其他
ハ、恒星界——光度、分光型、數と分布銀河、運動、二重星、變光星、星雲、星團

本講座は上記の加く連續し第一回講習會の基本科目をなせり、その說かるゝ所天文學全般に亘り純學術的にして中庸を得、幻燈を應用して連日熱心に之を講ぜられたるは感謝に堪へざる所であつて、吾等の啓發せられたる所も最も大であつた。

B、**時計の話**（三月二十三日）
上田理學士

先づ時計の原理より進んで今般東京天文臺に設けられたる、シンクロノーム電氣時計に就いて詳細に說明さる、天文學の基本觀念をなす「時」を計る時計を詳細に論述されたるは誠に得難い講演であつた。

C、**反射鏡の製造とテスト**（三月二十四日）
中村　要氏

現在日本の反射鏡研究者として第一人者たる中村氏が、三時間餘に亘り反射鏡の發達史原理等より製作法及び「テスト」に至る迄よくその祕とする所を開陳せられたるは吾人に取つて聞洩し得ない興味あるものであつた。

D、**天體望遠鏡の製造に就て**（三月二十九日）
日本光學工業會社技師　砂山理學士

實地光學界のオーソリテイたる砂山氏が反射鏡屈折鏡の原理及び其優劣論より入り天體望遠鏡の製造に就て詳細に論ぜらる、其製作者としての忌憚なき論評は吾人の望遠鏡に對する謬見を多々破る所あり、大に喜びとする所であつた。（尙本科目は三十日の實驗を附隨科目とす）

E、**レンズに關する諸種の實驗**（三月三十日）
砂山理學士

實驗の種類
イ、偏光器ニ依ル硝子ノ定性試驗
ロ、「アダム、ヒルガー」干涉計ニ依ル對物鏡ノ定性試驗
ハ、「ハルトマン」檢査器ニ依ル對物鏡ノ定量試驗
ニ、光度計ニ依ル硝子ノ吸收率測定
ホ、分光度計ニ依ル「プリズム」角度ノ測定
ヘ、「ニユートン」環ニ依ル平面球面ノ定性檢査及對物鏡凸凹間ノ間隔檢査
ト、「コリメーター」ニ依ル對物鏡ノ離心檢査其他

上記の內「アダムヒルガー」干涉計「ハルトマン」檢査器は日本唯一のものにして、是等大裝置に依る貴重なる實驗を、講習科目に加へ得たるは、吾東京支部の獨りよくなし得る所として深く欣びとすると共に、特に砂山理學士の御厚意と五藤支部幹事の努力を感謝する所である。

實驗後二十吋反射鏡の研磨室同二十吋試驗用平面板及び二十吋赤道儀を見學し、一週間に亘る講習會は爰に無事終了を告げた尙本日は東京天文臺の早乙女博士の御來會ありて揖尾の會合に錦上花を添へた。

3、**會員懇談會**（三月二十八日）

午後一時より商工奬勵館に山本博士中村要氏を主賓として懇談會を開く、參集者十六名先づ屋上にて太陽觀測を行ひ山本博士の黑點に就ての講話あり、午後三時茶話會に移り各人各種の感想を語り合ひ支部今後の活動發展を計る爲め、下記四氏を新に支部幹事に加ふる事に協議決定し何れも就任の承諾を得て同六時散會せり。

田村幸太郎氏　　松村時次氏
土居客郎氏　　淺野俊雄氏

尙山本博士は當日午後六時半東京發にて歸洛の途に就かれ、途中横濱に一泊、同支部の爲講演せられたり。

以　上

○北海道支部より

山本先生！、二十日から流星觀測を始める豫定でした。不幸にも二十日は朝から雲が空をうづめ、あまつさへ夜に至れば雨まで、にくらしく降るのでした。それでも二人の會員がやつて參りましたが觀測は中止の止むなきに到りました。二十一日にも雲が去りませんわまけに白い雪が一寸も降り積るのです。自根君と福馬君とは涙をのんで分れましたのも其の夜の十一時過ぎです。翌廿十二日は雲は昨日の樣にありますが時々青空がみえることもありましたので夜の晴空を晝中祈つて居りました。夕方六時頃雲は殆ど視界を去りました。全く不思議な程晴れ渡りました、八時近くに測候所から數丁しか離れて居らぬ私の家へ五人の同好會員がやつてきまして十時零分

から正しく測候所の廣い屋根の上で觀測が始められました。十時から十一時迄の間には僅か一個の收獲があつただけで幾分氣拔けがした樣でしたが夜の更けるに從つて收獲は多くなります。二時に月は沒して空は益々美しくなる許りです。三時をすぎる頃には東天に火星と木星が接近して出て居りました。また金星は地平線にあかく火の樣にもえて居りました。正三時半に觀測を中止しました。當夜の記錄はまづいプリトンでお送り致しました。右簡單にお知らせ致します。（四月二十六日米田勝彥）

○朝鮮支部より（大山）

私共、天文同好會（在鮮）員等は、昨三月二十五日午後七時より表記拙宅に於て、第一回支部會を開催致し、その宣言として

我々は朝鮮に於ける天文學の調査研究と、一般民衆の天文趣味普及を以てその目的とす。

といふことにし、それには先づ會員の增加がファストの仕事であるといふやうな話が出ました。

晩月ながら、會は生れ出ました。この上はこの幼子の日に增し生育するやうに偏におみとり被下ませ。

○朝鮮支部の宣言

天文と人生

人生を二等分すると夜と晝とになる。この夜と晝とを通じ、運命の悲喜劇を載せて、搖藍から墓場迄、變轉してゆく舞臺となるものを世に名付けて地球といひます。ではこの地球の概念はと申しますと、それは甚だ貧弱乍ら單なる宇宙塵中の一微塵に過ぎないと云はればならないのです。元來宇宙塵とはこの無限の宇宙に浮んで居る一塵埃であると云ふ意味で、畢竟この宇宙と云ふ無邊際の實在に對する時、一星辰一星宿といふものゝ存在が如何に微小なものであるかを云ふことを說明するものであります。地球にして已に然り、況や地球上の厘毛凸に於ておやです。

青史の照し見る所、古來如何なる大帝王の領土も、この地球から一歩も踏出すことは出來ませんでした。又如何なる大旅行家の足跡と雖も、それは竟にこの地球表面上に印された複雜なる線分の連續と云ふに過ぎませんでした。然るに獨り、天文の開拓のみは我々に無限の世界を供給しました。それは實に文字通り無邊際で無盡藏で、測り知られざる疑惑と情想とを我々に與へたのです。

ふと仰ぎ見る天上界、其處には無限のスペースと永遠のタイムとが握手して居ります。瞬き交す一刹那、想ひは遙かに宇宙の限界をさすらひゆくのであります。而も永劫から永劫にかけて、限りなく、淸く、美しく、氣高く、優しく瞬いて居る幾百萬の太陽の展列はその一つ一つが、同時にお互ひに相異れる時代の相姿を指示して呉れるのです。

この意味に於て、天は歷史のパノラマである。過去と現在と未來とを蒼穹と云ふ無限の大鏡に寫し出し、均勢された永遠の一段階として色彩の交錯と、熱力の調和との上に造り上げた宇宙の一大パノラマであると云へるのです。而も星辰の移置、星宿の變化は歷史を物語ると共に地理的配合をも物語つて居る。一聞、一見、極めて解り易き、興味あるパノラマなのであります。

然るに、一般の人々が、この興味あるパノラマを以て、卜者の手品か、學徒の醉興位に心得、この絕大なる人類の恩惠者に向つて、洞察の眼を注がないと云ふのは寔に不思議なことゝ云はればなりません。

想ひを遙かなる宇宙の限界に飛ばして、永遠から見た人生、社會、自我といふものを考へるといふ事、それは我々の生活に最も意義ある趣味の一半であると共に又一面この位、高尙で、優雅で、面白くて、萬人向きで、それで居て、學問と道樂とを兼ねたものはない筈ですのに。

實に天文を度外視して人生を云爲するのは日輪を讖つて自己の盲目であることを證するのと何等選ぶ所はないのです、ですから眞に正鵠なる人生觀を得んと欲する人は、決してこの天文の有價値と有意義とを忘れません。

日月の運行、星辰の明滅、それは明らかに人生の基調であり、意義ある生活への第一歩であります。天文趣味の窮極は、「天上の樂園」に到達するにある、その象徵は公平であり、自由であり、愉樂であります。そして是を知り、是を語り、是を感ずるのは、不朽なる自我を望んで止まない眞人の熱烈なる要求でなければなりません。この意味に於て、私は、是非とも、皆さんが天文を研究し、是を趣味の一半として、皆さん御自身の人生觀に於ける一基調とされんことを希望するものであります。

大正十五年四月